

## はじめに

ルフトハンザ機上から地表を鳥瞰した。日本新潟經由ハバロフスクから始まるロシアの広大なシベリア高原の森林地帯を飛行し、サンクトペテルブルクを経てバルト海に入り、ユトランド半島を眼下に見た後、ドイツのなだらかな丘陵に広がる農耕地と点在する集落を囲む森林に、素のままの美しい暮らしを見つけて、とても安心する。

ドイツと日本はともに第2次世界大戦における同盟枢軸国として敗戦したのだが、その後のドイツの農業政策は日本と大きく異なり、食糧自給率は1961年に67%であったが、1999年には101%に達した。1990年のドイツ再統一後、一時88%に微減した年もあったが、90%以上を維持している。反対に、日本の食料自給率は1961年には78%であったが、1998年以降40~39%にまで低下し続けてきた。

ドイツにおいては、都市と農村のバランスをとる行政策による効果があったのだろう。都市に人口集中しない政策で、大都市が少なく、農村居住者が多い。住民が100万人を超える巨大都市はベルリン、ハンブルク、ミュンヘン、最近100万人に達したのはケルン、合計4都市である。日本においては、東京都特別区、横浜市のほか、東大阪市までで総計36都市になる。

ドイツはEUの共通農業政策に従う。EUの条件不利地域対策はイギリス丘陵地での羊飼養保護、大陸での山岳農民助成に始まり、農業を続ける人々に直接支払を行うことによって、農業維持、景観保全、過疎化防止、即ち、地域社会を持続可能にすることである。その後、農業の集約化による環境汚染、生産過剰、これらに対して政策のグリーン化が求められ、環境公共財保全のために環境支払を行うようになった。

また、都市計画の中では、公用地にクラインガルテン（市民農園）やシューレガルテン（学校園）などが重視して位置づけられ、家族小規模自給農耕や食農教育の推進策となってきた。

これらの農業環境政策は機上、車窓、船上から景観を観察からも認められた。いづらか旅慣れすると、空港で免税品をお土産にする気はなくなる。街中の市場やスーパーマーケットに行き、地元市民が買い求めている日用品を探索する。ささやかな経験であるが、これまでのドイツ旅行で印象深かったことを記憶にとどめておく。

## 1 訪

日本環境協会の依頼でデンマークとドイツにおける環境教育の実態調査に行った。日程は、1996年6月17日から7月2日。ルートは、フランクフルト、(コペンハーゲン)、ボン(マインツ・マンハイム)、ベルリンであった。聞き取り調査報告書は下記に示した。ここでは、この報告書には書かなかった私的な感想や印象を、フィールドノオトを見て思い出しながら、書くことにする。

親しい大学職員の妹さんがドイツ人 RP さんと結婚していた。彼はジャーナリストで、緑の党の議員でもあった。日本市民の環境活動に関心があったので、私が案内を頼まれた。日本環境教育学会を創立する準備を始めていたころのことである。また、在外研究でインドに出かける直前の時期でもあった。都市で自給農耕をするグループなどを紹介して回った。彼からも、日本人の自然観について、ドイツ語に訳すので、日本語で良いから小論を書くように依頼された。帰国後の彼に小論を送ったところ、その直後に、ベルリンの壁が壊されて、その翌年には東西ドイツの統一が実現した（1990）。この歴史的な大事件によって、私の記事は吹っ飛んでしまって、残念ながら、掲載されることはなかった。この人脈を頼りに、ろくにドイツ語も分からないのに、調査に出かけたのである。

デンマークには、ワールドスクールで親しくなったギムナジウムの IH 先生がいたので、コペンハーゲンでは彼女夫妻の自宅に求めていただき、マーメイドやチボリばかりでなく、環境学校、EU 環境庁、教育省、IBM など環境活動の現場を見て回ることを援助してもらった。ギムナジウムの卒業式にも招待されたし、まことに短時間でエッセンスを見ることができた。この感想は別の機会のデンマーク旅行記に譲る。

RP さんの援助で、デンマーク同様に調査が進められると甘く期待していたのだが、子どもさんが風邪、彼はローマへの出張と重なり、一人で面接調査を敢行せざるを得ないことになり、下手な英語のみで意思疎通を図るしかなくなってしまった。ドイツ語は妻から習ったが、ほんの片言しかできない。しかし、自由で冒険的なこうした緊張感はかなり好きだ。

東京からフランクフルトまでの機中で、祖父が病気になって、ポーランドに帰省する父、息子 2 名と臨席した。父は無口だが、子どもたちは日本語と英語でおしゃべりだった。所沢在住の W 君らで、姓からして奥さんは日本人なのだろうと思われた。空港で 2 時間ほど待ち、コペンハーゲン行に乗り継いだ。その後、6 月 22 日にフランクフルトに戻った。空港から乗ったタクシーの運転手が学生かと聞いたので、教授だといったが、あまり信用されなかったようだ。年齢を聞くと彼は私より 1 歳上だった。私は相変わらず威厳が備わらないので、とても若く見えてしまうのである。良い植物園があるので、ぜひ行けと勧められた。翌日は都心にある植物園（Palmengarten）に行った。ラフレシアがいまにも開花しそうだった。本や種子を買ったが、多くの市民も苗木を買っていた。

6 月 24 日朝、ボン行の都市間特急 IC に乗り、ドイツ環境・自然保護連盟 BUND 本部に行った。ここは閑静な住宅街にあり、旧チェコスロバキア大使館の建物であった。職員の女性がとても機能的に、配送センターに連れて行ってくれ、たくさんの資料をエコバッグに詰め込んでくださった。彼女は学校英語しか知らず、英語を使ったのはアラスカに 6 週間行った時だけだと言っていた。さっぱりとして個人主義的で、仕事が早いので好感をもった。タクシーを呼んでもらって、環境保護局に行った。ここも各国大使

館街の端にあり、緑豊かであった。ここでは受付の女性にあまり英語は通じなかったの  
で、研究官の女性が呼ばれ、自然保護に関するドイツ語と英語の資料をたくさんいただ  
いた。

ボン大学の植物園に行くと、キビ、アワ、ヒエなどの雑穀も含めて 20 種以上のイネ  
科栽培植物が生態展示されていた。特に、コムギ展示畑にはヒナゲシ、ムギナデシコ、  
などたくさんの雑草が混ざっている伝統的な畑作を再現しており、とても感銘を受けた。  
こうした栽培法がコムギの伝播に伴い、随伴雑草から中国で冬野菜が起源したという  
栽培化過程が納得できた。

時間通りに、都市間特急 IC に乗ってフランクフルトに向かった。ところが、マイン  
ツからマンハイムに向かって曲がってしまった。恐らく行先変更のアナウンス（ドイツ  
語）があったのだろう。後から思えば、確かにマインツで大勢の人が降りた。車掌に確  
かめて、普通列車 RB に乗り換えて、フランクフルトに向かったが、到着は 3 時間遅れ  
になった。でも、車窓からゆっくり村々や人々を眺めることができ楽しかった。

フランクフルトの本屋は大きい。飲食物本専門店に行ったが、さすがに、世界中の本  
がそろっていた。雑穀 **Hirse** の本はないかと店員に問うたところ、発音が違うと直され、  
結局、1 冊だが、キビの料理法の本を見つけることができた。環境学習の本は聞いても、  
発見できなかった。英国の本を扱っている本屋は小さく、一般書しかなく、役立たなか  
った。

博物館めぐりをした。歴史博物館は青銅器時代以降の武器、キリスト教関係の展示が  
多かった。民族博物館は小さいが内容は良かった。「民族」とは何かを問い、地雷の展  
示など戦争と難民を扱っていた。国を追われる流浪の姿、奴隷売買、難民・移民の困難  
な就業など、良くまとめてあった。EU 諸国は難民を受け入れているが、日本の難民受  
け入れへのガードは堅い。考古学博物館は新石器時代の展示は少なく、土器展示が中心  
であった。家畜の伝播の展示はあったが、栽培植物に関しては見られなく、残念であっ  
た。でも、研究しているイヌガラシ属雑草では、ゲート像下のキレハイヌガラシは開花  
が始まったばかりか、種子はなかった。タネツケバナも路傍の植え込みに生えていたが、  
種子は飛散した後であった。スカシタゴボウも動物園にたくさん生えており、50cm ほ  
どに伸びて、種子をつけていた。

6 月 26 日、朝食に行ったら日本人観光客が大勢押し寄せていて閉口した。10 時に  
WWF-D を訪問した。B 夫人が 2 時間ほど応対してくださった。夫君はボンの環境保護  
局勤務ということだった。午後は動物園に行った後、ゲート大学の自然誌博物館に行っ  
た。化石、動物はく製、昆虫、鉱物などの、すごいコレクションが展示してあった。す  
ごいと感嘆するしかない。特に、人間が絶滅に追いやった飛ばない鳥 **Dodo** の復元標本  
にはいたく感動した。

6 月 27 日にベルリンに国内航空便で移動した。ホテル周辺を散策していたら、健康  
食レストランの窓に穀物の穂が飾ってあった。コムギ、エンバクに混ざって、キビの 1

穂を発見した。明日の夕食はパターソン食堂でとることにした。翌朝の太陽は5時に北東方向から出た。カーテンの隙間から射した陽光が顔にあたって目が覚めた。ブランデンブルク門近くの環境省 UBA に出かけた。これら官庁は旧東ドイツ側にあり、急速に都市の再整備が進められていた。担当の女性職員は自転車で通勤しており、トライアスロンをしているようだ。夫君との間に2人の娘（14と18歳）がおり、長女は学校休みでニューヨークに行っている。魚料理が好きで、昔は祖母によく作ってもらった。彼女の好意で、資料を航空便で送っていただけることになって、昼食に連れて行っていただいた。旧ドイツ空軍の本部建物で、玄関には旧東ドイツの社会主義を描いた、マイセン製の壁画があった。ID カードを持たないと官庁には入れないので、何か似たものを呈示せよと言われて、自動車免許証を示したが、日本語は読めないので駄目だと言われ、臨時の入構証を借りることになった。新しいベルリンの建築計画も展示されていた。

ブランデンブルク門のインフォメーションに行き、ウエルカムカード3日間を買って、フンボルト大学、歴史博物館、旧博物館を歩き、U Bahn でホテル近くまで戻った。健康食レストランに行き、ミンチボールとごはんを満腹になったうえに、件の1穂のキビを無理言ってもらってしまった。

6月29日は、U・S Bahn を乗り継いで、広大な植物園に行った。栽培植物の野外展示の中に、草丈に変異のあるキビが出穂しているところであった。午後は動物園・水族館に行ったが、雨が降り出し、おまけに雷もなったので、ヨーロッパセンターに入った。翌日は博物館島に行き、歩き回り、発掘品や絵画を見て疲れてしまった。さらに、自然誌博物館の展示のすごさに圧倒されて、疲労困憊の極地に達した。それでも、技術博物館に行き、汽車とビオトープを見た。打ち捨てられた線路跡に植生・土壌が回復しているのをビオトープと言っているようだ。夕食はハクインに行き、インド料理、ダルとアショカボードを食べた。ジャガイモがたくさん入った甘いカレーの上に、焼きナスを載せて、さらに、甘いカシューナッツ入りのピラフを載せた料理であった。

RP さんにお礼の電話をしたが、子どもさんが電話に出て、英語で呼びかけたら、「ママー」と言うや接続を切られてしまった。

参考：木俣美樹男、1997、デンマークとドイツにおける NGO を中心とした環境教育活動、海外先進国 NGO の環境教育活動に関する実態調査報告書 pp.61-77、財団法人日本環境協会。

## 2 訪

フランクフルトを拠点にした電車往復観光をした。妻の案内であった。日程は、2013年8月30日から9月6日。ルートは、フランクフルトから、ケルン、ハイデルブルク、フルダ、ビュルツブルクを都市間特急 IC で往復した。

フランクフルト、パルメンガルテンの南米展示はゆったりと明るい色調で、栽培植物

の写真や原物で展示構成をしていた。小菅のムカシモロコシやジャガイモ、トマト、などを中心に、南米より来た栽培植物の展示をしようと思った。この際には、トウモロコシの祖先種を明らかにしたイリノイ大学の Iltis 教授のコーヒー皿も公開するつもりだ。1983 年に、私が日米セミナーで初めて北アメリカに行った時、彼が祖先種を発見して間もない時であったので、休憩時間にトウモロコシの起源を皿にマジックで書いて、私に教えてくださった。私にとって貴重なその皿である。シュテーデル美術館で、フェルメールの地理学者をひっそりと見ることができた。この絵が日本に来たときは、立ちほだかる人の多さで、一瞥もする気にならず、通り過ぎてしまった。ゲーテハウスは大層立派な家で感心した。レーマー広場の聖バルトロメウス大聖堂を訪ねた。

フルダでは市宮殿のシュロス庭園、青が美しいシンメトリーの大聖堂前、ミヒャエル教会を歩いた。ちょうどマラソン大会があったので、沿道で声援を送った。昼食はゲーテが定宿にしていた「ゴルデナー・カルプフェン金の鯉」のレストランで、彼が好んだという料理を食べようとした。ところが、お客が多く、そのランチは品切れで、ディナー・メニューならできるとのこと、せっかくだからそのメニューにすることにした。散々待たされ、その間に少しワインの酔いも回って、しかもかなり高額請求されたので、チップは置き忘れてしまった。

ケルンの中央駅を出るとすぐに目前にそそり立つ大聖堂の威容に圧倒された。私たちはクリスチャンではないが、近年、妻が聖堂に魅かれており、各地で教会を訪れ、ろうそくを灯している。私はステンドグラスから漏れる光が好きだ。いずれ刺繍でステンドグラスの窓を表現してみたい。2015 年 5 月に行った天草の天主堂の床に敷かれた畳にも大いに感銘した。キリスト教会に限らず、聖なる場所はどこでも、たとえば、高千穂神社のような信仰の場の厳かな雰囲気は心を鎮めるようだ。しかし、信仰の場では決して写真を撮らないようにしているので、しっかり記憶するか絵葉書で補足するしかない。オーデコロンが「ケルンの水」の意とは、お恥ずかしながら、これまで知らなかった。老舗の 4711 本店に行き、講義の際に知ったかぶりを惹けらす目的で、教材用に古典のコロンを買った。「これが本物のオーデコロンです」などと、実際に民族植物学の最終講義で使ってみた。学生の皆さんにはあまり受けなかったようだ。私の思い出は、たいがい空振りする。昼食はフリーアームドムで、郷土料理ライニッシャー・ザウアーブラーテン（牛肉のワイン煮込み）を食べて、ケルシュビールを飲んだ。

ビュルツブルクでは、レジデンツ、大聖堂、ノイミュンスター教会で美しいマリア像を拝し、アルテ・マイン橋を渡ってマリエンベルク要塞を巡った。この橋のたもとにある水車小屋レストラン、アルテ・マインミュレのテラスで昼食をとった。マインの川風とビールの酔い心地がよかった。ここのスーパーで、中国産のアワも売っていたが、イタリア産のキビを買った。精白されていない粒を探して、2014 年初夏に 20 粒ほど小金井で播き、発芽したので、小菅の畑に移植した。草丈は低かったがよく取れたので、2015 年 5 月には道の駅小菅の駐車場わきの雑穀見本園に播種した。

ハイデルベルク城へはバスで行き、ケーブルカーで登り、歩いておりてきた。その後、ハイデルベルク大学には構内行のバスで行った。こじんまりした植物園内だが、歴史に敬意を表したい。マックスプランク研究所の写真を撮ったら、その後、デジタルカメラが壊れて、液晶が真っ白になり、写らなくなってしまった。16世紀の騎士の家、ホテル・リッターで昼食をとった。

### 3 訪

2015年6月23日から30日、南ドイツへのバスツアー観光に出かけた。ルートは、フランクフルト、リュースハイムからザンクトゴア（ライン下り、ワインの試飲）、ハイデルベルク、ネッカービショフスハイム、ネルトリンゲン、ローデンスブルク、レーゲンスブルク、ミュンヘン、であった。団体旅行は好まないが、昨今の世界状況や旅行の安易さにより、今回は大手旅行会社に身を委ねてしまった。8組の「老夫婦」に、添乗員FH夫人が付き添った。

翌24日朝、出発時間5分前にフロントに下りていくと、誰も居ない。玄関に出てバスを探そうとしたら、FH夫人が慌てふためいていた。あろうことか、私たち4名の客ばかりでなく、添乗員の彼女も置いて、バスはリュースハイムの丘に出発していたのである。彼女の荷物はバスの中、唯一ポケットに入っていた携帯で連絡を取り、バスを呼び戻した。他の客たちもおかしいと思いながら、しばらく躊躇しながら運転手に言わなかったようで、バスは街区を出る橋まで行ってしまったようだ。

フランクフルトのマイ・ツァイルの地下のスーパーで、ウクライナ産とドイツ産（bio500g）のキビ（Gold Hirse）を買った。リュースハイムではブドウ畑の上をゴンドラで下りながら、対面を昇ってくるゴンドラの観光客同士でにこやかに手を振り合った。麓駅のツグミ横丁を経て、ザンクトゴアまでライン下りをした。船上では日系店舗のワインの試飲をしながら、ローライを通過した。市内に戻ってから夕方は、ゲーテハウス、大聖堂を巡った。カフェのテーブルにはアジサイとキビ属の野草が飾ってあった。クラインガルテンは市街地の周辺、鉄道線路のわきに見られた。100m<sup>2</sup>程度の広さ、小屋があり、たいがいドイツ国旗が立っていた。ハイデルベルクに向かうアウトバーンでは、広大なムギ畑の中に風車が時折見られた。美しい農村集落が点在し、真ん中には教会、周辺には森が分布していた。ハイデルベルク城を再訪した。市街の史跡「学生牢」には京都大学のオフィスの表札があった。卒業生のYOさんがリエゾンで4月に来ていたのはここだったようだ。昼食に、マウルタッシェン（ドイツ風ラビオリ）を食べた後、ネッカービショフスハイムに向かう。

ネッカービショフスハイムからネルトリンゲンにむかうアウトバーンの両側には、広大でなだらかな丘に畑が広がっていた。オオムギは黄色になり完熟、コムギとライムギはまだ緑を残して登熟中、ジャガイモは開花していた。多分、砂糖大根だろう、1haほどに区画された畑が広がっていた。エンバクは1か所、30a程度見られ、登熟中であっ

た。菜種は完熟しているが、まだ刈り取られていない。各所には、ほんの少しずつだが、草丈の低い菜種が黄色の花を咲かせていた。ネルトリンゲンは隕石の落下によってできたリース盆地にある中世の城塞都市であった。城壁には少しだけ登ってみた。のどかな田舎町の風情であった。家族経営のような小さなホテルの庭は広くてとても良かった。ベンチに2人が座っていると思ったら人形であった。子どもたちが自転車競走を庭でしていた。

ローデンプルクも城砦都市で、古いホテルの別館に泊まった。ほとんど中世の調度があり、何百年か前の匂いがした。道路は10x20cmほどのブロックの石畳、自動車はバタバタと言ってせまい市街を走る。聖ヤコブ教会など市内を巡った。城壁には櫓が残っている。マルクト広場には地区ごとの井戸がある。リンゴ、サクランボ、クルミが見本程度に街路に植わっていた。菩提樹は各地で開花中、良い匂いがしていた。インドボダイジュとはまるで違うことを、今更ながらに知った。ゼニアオイは畑の雑草で開花中、タチアオイはまだ咲いていなかった。バラはどこでも痛みがなく、清らかに美しい。教会の塔には上らずに、そのわきにあったスーパーで野菜と花の種子を買った。フランケンワインは購入し、宅配にしてもらったが、名物シュネーバル（雪の球状の菓子）は大きすぎて食べきれず、買わなかった。夕食は、マスのフィレなどを食した。

ミュンヘンに近づくとつれて、さすがにビールの名産地、ホップの畑が多くなった。それでも、広大な畑で食糧自給は万全だ。トウモロコシは飼料用で、各地で旺盛に生育していた。太陽光パネルも、人家、工場、畑の周辺に展開していた。自然エネルギーに転換しようとの政策が強くうかがえる。日本の農業軽視、他国に食料を依存する政策は全くの誤りだ。中央政府が食糧自給政策を強力にとらないなら、市民は家族自給農耕を用意し、安全でおいしい食物の一部でも自給するように準備すべきだ。地方行政府や地域、家族が生活を自助せねば、自然災害と人為災害に際して、地域や家族の生存を危うくする。レーゲンスブルクでは、大聖堂、旧市庁舎を見て、工事中の石橋を渡った。河岸では音楽祭が行われ、ロックのような大音響が流れていた。昼食は醸造施設のあるレストランで、ソーセージを食べ、ビールを飲んだ。

ミュンヘンからフュッセン郊外のノイシュバンシュタイン城に向かった。この途上に、キビ畑らしきところ1か所、他の不耕作地にキビの1穂らしきものを一瞬見たようだ。マリエン橋から見る城はことのほか美しかった。だが、ホーエンシュヴァンガウ城の方に親近感が持てそうであった。麓の日系店舗で、バウムクーヘンを土産に購入した。近隣にあるヴィース教会内の美しいマリア像、比較的簡素な建物の外観からは想像もつかなかった美しさであった。バスから見ていて気が付いたのだが、村の入り口にはキリスト像があり、村ごとに教会もある。2014年に行ったフランスでも、同様であった。地域に悪いものが侵入しないお守りということのようだ。個人でも十字架のロザリオを身につけている人は多い。信仰を象徴し、支える物である。では、現代の日本人にとって何があるのか。江戸時代の宗門改め、さらに明治維新前後の廃仏毀釈から国家神道によ

って、日本人は宗教への信心ばかりでなく、深い信仰心をも骨抜きにされたのだろうか。

夕食にはヴィーナーシュニッツェル(ウィーン風カツレツ)とマスのグリルを食べた。帰国日の朝、胡桃割り人形を新たなコレクションに加え、パン屋でブレーツェル、ロッゲンブロート2個を買って、持ち帰った。ファーバーカステル社の水彩鉛筆も、12色を孫に、36色を私用買った。マリエン広場の新市庁舎の仕掛け時計の人形が11時に動くのを見て、帰国の途に就いた。

どこに行っても、城砦や教会が修復維持されており、古い建物景観を大事にしている。都市は小さく、古い建物を保存、内部を現代的に改修しても、外壁面はしない。また、陸や河川の街道を大事にしている。ロマンチック街道通過証明書をもらった。Bio商品の多さ、野菜類が多いが、キビにもbioマークがついていた。

### 経験から学ばない日本人

ドイツに視察調査に行った日本の行政職員や研究者は多く、彼らの著作も少なからずある。しかし、読書しない日本人はドイツの経験から総合的に学んではない。いつもの悪しき保身習性だが、ご都合主義というか、いやな表現だが、「美味しいところだけ、いいとこ取り」、「洋魂」を抜き去った洋才を「和風」に模倣して、口先だけで、行政策に行動を伴わなかった。「こんなに視察者が多いのに、日本人は何も学ばないのか」とはあるドイツ人の言である。学校で教育されたささやかな知識の枠組みからはみ出して、歴史や行政策経験による新たな学びをしようとししない。日本人の確信的保守ではない、実は曖昧な保身体質、自己の頭で深く考えないことから、この国の社会は良い方向に変わらない。逆説的に聞こえるだろうが、イギリスのような穏やかな保守的暮らしからは、確かで斬新な行動が生まれてもいる。経験から学び、考え、自らの意思で行動し続けたい。

とりわけ、環境保全を実行しながら、食糧生産を自国で賄えるように、あるいは地域で、家族で自給自立できるように、多面的な政策を検討するべきである。第2次世界大戦中および敗戦後の飢え、東日本大震災後の食料供給、自然災害による食料不足、人為災害による食料汚染、この70年に次々に起こり、どれだけ多くの苦難の経験があることか。どうしてこれらから学び、備えようとしなかったのだろうか。

NHKの合瀬宏毅解説員(2014年8月)は、「なぜ上がらない?食料自給率」と題して解説をしているが、この中で次の点を指摘している。「食料自給率は、消費者が自分の食べるもののうち、どれだけ国産を選んできたかを示すものです。農産物が売れないと農家も経営できませんし、農家がいなくなると、消費者も困ってしまう。…生産者が需要の変化に適応できず、消費者が求めるものを供給できなかったことが、自給率を下げた大きな原因だとされています。…そうした国々は農家1戸あたりの耕作面積が、日本の数十倍と広く、…。TTPなど今後、経済連携が進む中で、日本は逆に自給率が低下する恐れも…。最近では円高で輸入食品の価格は軒並み上がっている。天候不順による

食料の供給は不安定さを増すばかり、…。新たな品種や技術の普及も進まなかった。助成金をもらうことが目的化して、…。今後農業を担う50歳未満の人は、18万人と全体の10%にすぎない。これまで以上に若い人たちの新規参入を増やし、…企業の農業参入を進め…。品種開発や機械化を進めて生産力を高めることになると思います」。

すべての生き物は自分の食べ物は自分で獲得している。人間とて例外でなく、自ら狩猟、採集、農耕してきた。ところが、この解説に見られるように、現代の日本人の多くは自ら食べ物を獲得するという生き物としての根本原理を失ってしまった。すべてを他人事のように平然と語っている。何十年にもわたって、自給率が向上しないのは、そうした政策を意図してとっているからだ。日本の水田稲作減反・補助金政策は品質の良い安全な作物を作り、環境保全をする方向ではなく、単に安直な稲の生産量調整のため、農家の生産意欲や職業的誇り、社会的信頼を衰微させた。理念は人の行動を支えている。金銭だけで人は行動を決めてはいない。

このくには温暖な風土で草木の繁茂生育が良く、耕作放棄すれば、すぐに生態遷移が進み、山野荒地や豊葦原になり、耕して天に至る父祖の努力を無に帰すことになる。再び開墾するのは容易ではない。放棄しないで、粗放で良いから、環境保全に配慮した家族自給農耕を続けるのがよい。環境悪化と人口増加も著しく、きわめて危機的な状況にあるからには、市民は家族や地域社会を守るために、市民は小規模家族自給農耕を自ら行い、また、地域で推進するように多面的で複線的な地域政策を提案し、実現に向けて具体的に行動すべきだ。都市には多くの不耕作地があり、法律も整備されてきたのだから、地域行政はもっと積極的に農地を借り上げて、市民農園を拡大すべきだ。ドイツ他、EUの未来の暮らしを見た政策やNPO/CSOの活動から学び、日本の誠実な実践で国内外と交流しながらトランジションの理念を実行に移そう。 2015-7-18